

研究ノート

# 崔南善と吉田東伍の知られざる交友 The Unknown Friendship Between Choe Nam-seon and Yoshida Togo

付 崔南善の追悼文「故吉田東伍博士」の翻訳  
With a Translation of the Written Memorial *The Late Doctor Yoshida Togo*

波田野節子<sup>1</sup>・田中 美佳<sup>2</sup>  
HATANO Setsuko / TANAKA Mika

キーワード: 崔南善、吉田東伍、『日韓古史断』、『大日本地名辞書』

Key words: Choe Nam-seon, Yoshida Togo, “Ancient History of Japan and Korea”,  
“Geographical Dictionary of the Empire of Japan”

## 1 はじめに

筆者が崔南善の追悼文「故吉田東伍博士」を翻訳することになったのは、3年前に新潟国際情報大学の吉澤文寿氏から依頼されたためである。吉田東伍の親戚筋にあたる方から翻訳を頼まれた氏は、専門が韓国現代史であるため、崔南善の友人の李光洙を研究している筆者に声を掛けたのである。

崔南善(1890～1957)は、韓国で最初の総合雑誌『少年』を創刊し、李光洙とともに近代文学の礎を築いた人物である。1919年に3・1独立運動の宣言文を起草し、のちに歴史学者として多くの著作をなした。一方、吉田東伍(1864～1918)(以下、東伍と略記する)は『大日本地名辞書』の著者として名高い歴史地理学者で、阿賀野市保田に記念博物館が立つ新潟県の偉人である。この二人の間にいったいどんな関係があるのかと、筆者は興味を持たざるを得なかった。

追悼文によれば、崔南善が東伍を知ったのは早稲田大学に留学した1906年で、実際に交友が始まったのは1916年である。その2年後に東伍は病気で急逝し、崔南善は敬愛の情に満ちた追悼文を書いた。そして翌年、3・1独立運動の宣言文を起草して投獄され、のちに歴史学の道を歩むことになる。

崔南善の全集は二種類あるが、「故吉田東伍博士」はそのどちらにも入っておらず<sup>3</sup>、二人の交友は世に知られていない<sup>4</sup>。そこで筆者はこの追悼文を翻訳して解題をつけることにした。作業は以下の手順で行なった。崔南善を研究している九州大学大学院博士課程院生、田中美佳氏(朝鮮史学専攻)が直訳し、それを筆者の前の同僚である新潟県立大学名誉教授の板垣俊一氏(国文学専攻)が口語文に直し、筆者が全文を確認して解題を書いた。訳文だけでなく内容についてもさまざまな指摘をくださった板垣俊一氏、漢字入力をしてくれた新潟県立大学非常勤講師の桜沢亜伊氏に、この場を借りて心からの感謝を申し上げる。

## 2 解題

『故吉田東伍博士』は、そのころ朝鮮で唯一の朝鮮語全国紙だった『毎日申報』に、1918年1月29日から2月3日まで6回にわたって掲載された。東伍が静養先の銚子で客死したのが1月22日、その1週間後に掲載が始まっている。崔南善は2年前にこの新聞に東京見聞記を連載しており、そこには東伍の書齋訪問記も入っていたから、その縁もあったのだろう<sup>5</sup>。筆者名は六堂生。六堂は崔南善の号である。文章はハングル混じりの国漢文で書かれている。

『故吉田東伍博士』の第1回で、崔南善はまず東伍の経歴を語る。越後の片田舎で生まれた東伍は、体系的な教育を受けなかったが、本を読んで自ら学ぶ習慣を身につけ、志を立てた。そして北海道を放浪したあと上京し、読売新聞の記者になって「落後生」の筆名で著名な学者と史論を戦わせ、明治26(1893)年に最初の著書『日韓古史断』を出版した。

著名な学者というのは田口卯吉のことで、東伍は北海道にいるときすでに彼に論争を挑んでいる<sup>6</sup>。また読売新聞の記者になったのは、姻戚にあたる市島謙吉(春城)が同紙の主筆をしていた関係による。早稲田大学の実力者であった市島は東伍の才能を認め、早稲田の教員になるときも尽力している。

『日韓古史断』において、東伍は朝鮮の新羅と加羅を日本と同系の「同胞小弟」と位置づけていたので、日本が韓国を併合すると、この書は併合の正当性を歴史的に裏付けるものだという評価を受け、複製された。このために韓国では東伍は歴史を歪曲したと論じる向きもあったが、最近はより広い視野から東伍の日韓関係認識を研究する論文が出ている<sup>7</sup>。崔南善は、この書は併合のあと「時勢とも共鳴して評判がいや増すこととなった」が、「著作物の運命にはこのような明暗があるもの」だと書いている。彼が東伍のことを歴史を歪曲するような学者でないと考えていたことは、追悼文の後半を読めば明らかである。

突然の訃報に接してすぐにこれだけの経歴を書けたのは、彼が東伍の著作を読んでその業績をよく知っていたからだろう。また東伍の若き日の苦悩に踏みこんだ記述は、連載最終回で言及している東伍の漢詩集『松雲詩草』に依っているものと思われる。東伍は書齋で酒を酌み交わしながら崔南善にそうしたことを語ったのではなからうか。崔南善自身、系統だった教育を受けていないだけに、独学で学者として大成した東伍の経歴には関心があったはずである。

第2回は、東伍の代表的な著作である『日韓古史断』と『大日本地名辞書』についてである。崔南善は、東伍の学問の特徴は広く詳細な考証、そしてそれを応用した透徹した見解と鋭敏な論断であると述べ、『日韓古史断』を、仮定を意味する「考」の文字を避けて「断」と名付けたことに東伍の気骨が現われているとする。

『日韓古史断』を出した翌年に日清戦争が起き、大陸を見たかった東伍は従軍志願したが、海軍に配置されて願いはかなわなかった。しかし、これをきっかけに彼は「学界を震撼させる人並み外れた大著」をなすことを決意して、『大日本地名辞書』を起稿する。崔南善は「最初に決心したときの勇氣は、その後の長い苦勞を堪えつづけた強靱な精神力よりも十倍も称賛する価値がある」と、最初の決意を高く評価している。これを読んで筆者は、「始めが半分」(始めることが難しい。始めさえすれば半分終わったようなものだ)という韓国のコトワザを想起した。終わり方を重視する日本とよく比較されるコトワザである。

第3回は、『大日本地名辞書』完成までの苦勞話である。「誠に感じて物質で援助する金持ち」とは先述の市島謙吉とその本家筋にあたる貴族院議員の市島徳次郎、「拳を壮として出版を承諾する書肆」とは富山房のことである<sup>8</sup>。東伍は起稿5年目に第1巻を世に出し、その翌年、東京専門学校(のち早稲田大学)文学部史学科の講師に就任した。そして明治40(1907)年、起稿から13年目にして全13巻を完成させる。『大日本地名辞書』は名前だけ見れば地名を集めたものようだが、「内実は山川、城邑、道路、宿場、人情、風俗、文書、器物を一定の規則で配列し、「個々の地名に関する書籍の誤謬を正し、伝わり来たれる誤解を解き、千古の疑問を一筆明断した四方四千項の

大著書である。それをたった一人で完成させたのである。この功績で東伍は早稲田大学から博士号を授与された。

第4回では、いよいよ東伍との交友が語られる。「私が博士の聲咳に接したのは、地名辞書が完成する前年、早稲田大学に数ヶ月在籍したときに博士の日本地理と明治史の講義を聴いたことに始まる」。これは1906年に崔南善が早稲田大学専門部歴史地理学科に入学したときのことである。実は彼はそれ以前、1904年に14歳で皇室特派留学生として東京府立第一中学に留学したのだが、このときはストレスのために1年半で帰国し<sup>9</sup>、2年後に早稲田に私費留学したのである。

東伍の講義についての崔南善の回想はなかなか面白い。「当時の私は物を知らないこと甚だしく、博士の力量を識認するだけの眼がなかった。また博士は風采俊秀でもなく、言論卓抜でもなく、戯曲的な構成もなければ台詞のような飾り気もないため、講義室と舞台を混同している多くの学生にとって、博士の講義は大喝采を博するような精采あるものではなかった」。この部分は現代の学生とよく似ている。

翌年『大日本地名辞書』が完成し、その偉業を知った崔南善は東伍への「仰慕の情」を抱いたが、「偶然の椿事により私の学校生活が終わったことを告げられないまま京城に帰り、とうとう直接お目にかかる機会はなかった」という。

「椿事」とは1907年3月に起きた「擬国会事件」のことである。早稲田大学では毎年帝国議會を模した「擬国会」を開き、学生が議員に扮して討議を行っていた。ところがこの年の議題は、大韓帝国を併合した場合に大韓皇帝をどう待遇するかというものであったので、憤激した韓国留学生が抗議のために全員退学して帰国する騒ぎになった。このとき崔南善は学生の中心となって退学し、以後、正式の学校教育は受けていない。退学後、印刷機を購入して帰国した彼は新文館という出版社を創立、1908年に韓国で最初の月刊総合雑誌『少年』を刊行する。創刊号に発表した新体詩「海から少年へ」は、韓国最初の近代詩とされている。

韓国が併合されて『少年』誌が発行停止になると、崔南善は1914年に『青春』<sup>10</sup>誌を創刊する。この雑誌は1915年3月に国是違反で停刊になり1917年5月まで再刊できなかった。崔南善が東京に長期滞在をして東伍と交友したのはこのときである。

「去る丙辰(1916)の年の春、用事で東京に滞在した際に偶然の機会があって旧誼を取りもどし、あらたに教を乞うことになった」。「偶然の機会」というのは、友人の玄相允が早稲田大学に留学中で、東伍の講義を聴いていたことをさす<sup>11</sup>。

「日々往来して酌み交わすあいだに互いに意思が通ずることを知り、それにより私が得た益はまことに大きかった」。崔南善は1910年に「朝鮮光文会」を創立して朝鮮の古典文書の編纂と刊行をしており、彼の朝鮮書籍への愛着は人並外れていた。一方、東伍は前年初めて京城に講演旅行をしたばかりで、彼の書齋には朝鮮書籍がうずたかく積まれていた。

東伍の朝鮮への関心は格別のものであったようである。『大日本地名辞書』には実は続編がある。北海道をはじめ大日本帝国の一部が入っていないからだ。ところが1909年に出た続編には北海道・樺太・琉球・台湾の部だけで、朝鮮は入っていない。朝鮮が併合されるのはこの翌年だが、あとで入れることもできたはずだ。東伍にとって朝鮮はライフワークであり、じっくりと取り組むつもりで続編にしなかったのではないだろうか<sup>12</sup>。崔南善と東伍との共通の話題が朝鮮書籍と古代史であったことは想像にかたくない。

「もちろん歴史上の議論においては見解が大きく異なる点もあり、また意見が違うところも多かったが、私が博士に望むところと博士が私に期するところは同じであり、まことに意味深いものがあった」と崔南善は書いている。東伍が自分のライフワークである朝鮮からやって来た若くて有望な歴史学者に大きな期待を抱くのは当然だが、それでは崔南善のいう「私が博士に望むところ」とは何だったのだろう。

第5回で崔南善は、歴史と権力者との関係について述べながら、彼が東伍に望んだものを明らかにしている。「史学は、文明の記録という点で百世の真偽を照らす鑑であり、民族の公式記録という点で万世の榮辱のかなめである。(中略)然るに、(権力者が一引用者)天下の耳目を欺いて庶民の精神を摩耗させ、判断力を狂わせ、得失観念を失

わせるには歴史を悪用することが最も巧みな方法であるから、史家にはこの種の誘惑と脅迫がつきものである。

彼が東伍に期待したのは学者としての「志操」と「気骨」であった。「いまこの歴史学界において、博士のごとく権力に媚びず、便宜に流れず、観ることを信じ、信ずることを言い、努めて真を求め、ことさら虚言を弄さぬ人格者を有することは、実に頼もしいことである。私が衷心より博士を欽慕する理由もまたここにある」。

東伍が学問で得られた成果について信念を曲げない人間であったことは、読売新聞時代に久米邦武の神道についての論文が問題になったときに久米を擁護する記事を書いたことや<sup>13</sup>、喜田貞吉編纂の国定教科書の記述から南北朝正間問題が起きたときに北朝が正統だと主張したことにも表れている<sup>14</sup>。そうした事件のことを崔南善は知っていたであろう。そして酒を酌み交わしながら東伍の学者としての芯の強さを実感したのだろう。「誰よりも切実に博士を信じ期待するところの大きかった私は、博士の健闘を祈ると同時にその長寿を願わずにはいられなかった。あわせてその健闘と長寿が我々にとって大いに関係あることを深く信じたのであった」と書いている。

1916年冬に朝鮮に帰った崔南善は多忙の日々を過ごした。そして1918年を迎えてまもなく、東伍の急死を知ったのである。「ああ、天はこの学問……私の関与しようとしている史学に禍をなした」という言葉は、彼の「望み」が絶たれたことへの嘆きである。このころ本格的に史学の道へと踏み出していただけに、その衝撃はいっそう大きかったのだろう。

第6回の最終回で、崔南善は東伍の冥福を祈り、東伍が残した漢詩集『松雲詩草』所載の7つの詩を載せている。この詩集には東伍が満16歳から27歳までに作った詩が収められている。知人の序によれば、東伍は若いとき漢詩を非常に愛し、「耕暇詞章に耽り、父兄の厭う所となる。しかして性なお改めず。常に曰く、死するもまさに悔いなし」と<sup>15</sup>というほどであったが、北海道を放浪して故郷にもどったあと、発奮して漢詩を棄てたという。東伍が上京するのはそのあとである。崔南善は、これが東伍の研究と蘊蓄の始まりであったと書いている。

この追悼文を書いた翌年、崔南善は3・1独立宣言を起草して投獄され、その後、紆余曲折の人生を辿りながら歴史学者としての道を歩んだ。崔南善の孫にあたる崔学柱氏が書いた『我が祖父六堂崔南善』という本に、崔南善の手帳にあったというメモの写りが載っている<sup>16</sup>。1928年ころのものと推定されるそのメモには、『朝鮮大辞典』の見出しのもとに、1. 朝鮮人名辞書 2. 朝鮮地名辞書<sup>17</sup> 3. 朝鮮図書文芸辞書 4. 朝鮮歴史辞書 5. 朝鮮民俗辞書という5つの辞書名が並んでいる。崔学柱氏は、この5つを合わせた『朝鮮大辞典』を編纂することが祖父の若いころからの夢で、17万冊の蔵書はその資料として集めたものだと思うと書いている<sup>18</sup>。

植民地時代も終わりに近い1943年、崔南善は『朝鮮大辞典』の編纂作業に着手した<sup>19</sup>。日本の植民地支配が終わり、以前日本に協力したことで反民族行為処罰法に問われながらも作業は続いた。しかし第1巻「ㄱ」行(ハングルの最初の行。あ行に該当)の途中まで行ったところで朝鮮戦争が勃発し、蔵書と数十万枚のインデックスカードが焼失してしまった。2年後、ソウルにもどった崔南善はふたたび作業に着手する。その2年後に中風で倒れたとき、辞典は「가」から「오」(あ行の「あ」から「お」)まで脱稿していた。

完成する見込みがほとんどない辞書の編纂を続けた崔南善の脳裏には、若いときに酒を酌み交わした東伍の面影が浮かんでいたのではないだろうか。倒れて3年後の1957年に崔南善は亡くなった。辞典は未完のまま『韓国歴史辞典』として玄岩社の『六堂崔南善全集』第12巻に収録されている<sup>20</sup>。

### 3 訳文

故吉田東伍博士(一)

生きては一時時代の尊ぶ師、死しては永遠の典則、存して功績いよいよ大きく、死後に名声いよいよ大きく輝く者、それが学者である。位人臣を極め、富は郡国を傾けようとも、権勢や栄華は一朝にして幻となるものである。学者をどうしてこれと比べられよう。しかし独力で学問を開き、精細な識見と、卓越せる人徳と、高邁な才能をもって明確な学説を打ち立て、時代を越えた新機軸を打ち出すことは、じつに容易なことではない。聡明な性格と忠実な行動力を兼ね備え、その生涯は山の如く聳え、どれほど畏敬しても畏敬し足りない人、それは我が震卿・吉田博士を置いてほかにいない。

聞けば、吉田博士は越後の大鹿<sup>21</sup>の人だという。越後地方は昔のいわゆる東北僻遠の地であり、大鹿は片田舎の寒村である。博士は、当初学術によって身を立てるつもりはなかったもので、系統的な教養は中学の程度も修めたことはなかった<sup>22</sup>。ただ家が旧家であったために親戚や知友に篤学な蔵書家が多く、自然とその影響を受け、幼いころから書物を読みあさる癖がついただけである。成人したのちは兵役に服し、除隊後は家事に束縛されて世事に明け暮れた。さらに北海道へ渡り、猟師や樵で生計を立てもした。博士のような傑出した人物にとってもこれは鬱々として耐え難い一時期であった。

しかし鬱蒼と茂った樹木の枝葉は、冷厳霜雪のもとで新芽を培養すれば、逆境を跳ね返す力がますます持続し、芯の強さはますます現れるものである。博士が他日、歴史地理学上の泰斗として学界における権威となる素地は、この流離と困頓の時期に作られたものであろう。あるときは地方の学校の体育教師に雇われ<sup>23</sup>、またあるときは書記係の役人として働きながらも、書物を読みあさる嗜好と、ものごとを精しく探究する勉学の習慣を若くして身に付け、志すところは一二にとどまらなかった。明治二十四五年ごろ、歴史に関する議論が盛んに起こったとき、博士は「落後生」という匿名で「読売新聞」紙上に論陣を張り、「史学雑誌」や「史海」に論陣を張る著名な学者と史論を戦わせた。書物を博搜して得た広い知識と、明晰な論理を縦横に駆使する力量が、じつにこの東北辺境の一青年の困窮生活のなかで培われ、しかもその創見が独学によって切り拓かれたものであったことを思えば、その辛苦の努力たるや尋常のものとは思われない。

明治二十六年に至り、博士は『日韓古史断』の一書を公刊した。これは、内外の典籍を調べ尽くし、日本の歴史の出発点としての韓日古来の交流の事実と影響関係を明らかにした大著である。参照した文献の多さ、分析の精密さ、論断の明快さは、空疎な史論の多かった当時の学界にあって明らかな異彩を放ち、那珂通世、林泰輔など数名の学者のほかは朝鮮史に関して見るべき研究のなかった当時、この分野にじつに大きな寄与をなしたことは贅言するまでもない。それより数十年を経て学問は推移し、ますます盛んになって、優秀な学者による斬新な説も少なからず世に出たが、朝鮮半島および韓日交流史に関する系統的研究としては、本書が最先端かつ唯一のものであることは遺憾ながら事実である。現在では、この分野の全体および部分を通じて、異説や新説も一二にとどまらない。そのために新たな問題が提起されていることは確かであるが、この種の分野におけるもつとも優れた業績であるという荣誉は、何びとも否定することはできない。また、前人未踏の労作であるこの名著が、勉学の環境にも恵まれず、書物を読む機会にも恵まれず、自分一個の努力がすべてであった一人の若者、すなわち二十六歳の一青年の手によって著されたことは、学界の一佳話として永遠に残るであろう。

本書を開くと、白抜きの内題の両脇に赤い小文字で、本書の新説と成果が細かく言い尽くされている。そこには、「アジア東方古代史の垂れ幕は切って落とされた！ 海に依り、島に依った海山の多くの古い国々、波に揺られ風に揉まれて起き転ぶ当時の世界は、生き生きとして目の前に現れ来た。なぜかと言えば、ほかでもない。本書は新旧内外の史書を広く検証しているからである。また、緊密な関係、的確な比較、これを古今の歴史に求めてあくまでも追究しているからである。その宇宙を開く原野は、『大日本史』のような視野の狭さを持っていないからである。そ

れゆえに、検討するところが広汎にわたることで自然と創見が生まれ、明らかになることが多い。これまで分からなかったことが明らかになり、一千年の論争も一言によって断定されることとなった<sup>24</sup>云々と記されている。多少学術的であるが、無名の一学徒が得意の労作を世に送り出そうとする意気込みを、ここに感じ取ることができよう。

著者みずから述べているように、古代史の年代の間違いを正し、見識の狭い古代史観を排除し、古書に「築紫」「韓郷(カラクニ)」と呼ばれた地域を明らかにし、時代の変転を見極めて国家や民族の盛衰を論じるときの論証の鋭さなど、それぞれに苦心の跡を残す六百頁の大著が、たった一人の無名の学徒の処女作だったのである。多くの読者の目に触れる本ではないが、少数の専門家の間にはじつに深大な注意をもって迎えられ、歳月とともにその価値はますます高まり、とりわけ韓日併合後に至っては、時勢とも共鳴して世の評判がいや増すこととなった。著作物の運命にはこのような明暗があるものである。

(1918年1月29日『毎日申報』1面)

## 故吉田東伍博士(二)

檀君伝説を扶余の南漸の隠喩とみなし、脱解の多婆那国を今の肥後玉名郡、筑紫の伊都国を辰韓人が来て建てた国、越前の能登は安羅の植民地、「漢委奴国王」印の「委」の字は印文を五字にするためわざと挿入したもので特に深い意味はないこと、さらには継体帝の在位二十五年を十年とみなしたことなどは、すべて大胆だが的確な新説として学界で肯定されている。狗邪を金海、安邪を咸安、瀆盧を東萊地方、比自妹を比自火だと推定したことも、当時の学界にあってはひとつの創見であった。吉田博士の特長は考証の広さと詳細さ、そしてそれを応用せる透徹した見解とそれに基づく鋭敏な論断にあり、それは生涯にわたって研究と述作に一貫するところであるが、すでに最初の成果たる『古史断』一篇中に余すところなく表われている。

博士は意志の人であり気骨の人である。強靱な意志と曲がらぬ気骨は、その学問と言論に緊密に関係していることを忘れてはならない。故蹟の実証と遺物の傍証がほとんど欠如していた当時において、いくら周到で緻密とはいえないまだ疎略な点も空漠な論究も見受けられる本書を敢然として「断」と名付け、「考」などの仮定を意味する文字をわざと避けたことも、じつに芯が強い博士の性格の発露であった。今後、新材料は必ず発見されよう、そして新事実もむろん明らかになろう。だが現在のところ最善を尽くしてこうと確信したからには、どうして矜持を捨てることができようか、自説を公言することを畏れようかと、あえて「古史の断」と名付けたところにじつに博士の気骨ある姿を見ることができる。

当然のことながら机上の考察はじつに実地の踏査に及ばぬことを痛感し、夢魂は遼々たる韓山の間に馳せ遊ぶこと久しかったが、しかしついにその夢がかなくなるときがきた。『古史断』刊行の翌年、日清戦争が起こると十万の大軍が海を渡り西に向かった。山川の形勢を知り、風物の情態を実地踏査し、書物の秘と金石の隠とを探る天与の機会であると思った博士は、軍隊に志願して出征の道に登ったのである。しかし、こと志と違って海軍に配属されることとなり、渤海の風浪と台湾の悪天候のために、得たものはただ痩せたおれの身体のみであった。積もり積もった疑問を解き今後の学問の材を得ようという望みは、すべて無に帰したのである。しかし、この行動が博士の心に与えたものは甚大であった。つまり論著に満足せず、学界を震撼させるような人並外れた大著を企図しようという心が、このとき湧き起こったのである。このことは、博士がしばしば口にされたことであり、『大日本地名辞書』編纂の趣旨書のなかにもそれは記されている。

このあと『徳川政教考』<sup>25</sup>、『利根治水考』<sup>26</sup>等の著書を発表して該博な知識を披瀝し、警抜な観察力を發揮したが、これらはすべて博士にとっては余業であり副業にすぎず、他日の大成を期して営々と研鑽に励んだ目的は別にあつた。先年、日本開闢以来の最大著述という盛名により学界を震撼させ、世人を驚かせた『大日本地名辞書』がそれである。一心をこれに傾け、一身をこれに捧げ、一生をこれに懸けて、それまで不明だったことを明らかにし、人があえて手を付けなかったことを行うのであるから、自ら任じ自ら期することの弘大さは、まことに人の心を驚かすに足りた。

さらに事は巨大、業は至難であり、いつ終わるとも知れなかった。いくら智識が該博とはいえ無名の書生であり、いくら志の篤きことを持んでも資力なき少年であった。それゆえ、つねに自らの身を挺して事を成し遂げて行くしか手立てがなかった。最初に事を始めんと決心したときの勇氣は、その後の長い労苦を堪えつづけた強靱な精神力よりも、十倍も称賛に値する。世の信用を得るために名士の仲介と推薦を受け、資力を得るために書肆の庇護を仰ぐなど、安心着手するまでの惨澹たる苦心、苦労は、もはや他人の想像を越えたところにあった。

(1918年1月30日『毎日申報』1面)

故吉田東伍博士(三)六堂生

大事を行なえば体と心の苦労もそれだけ大きい。一難過ぎれば一難来たり、一便得れば一便が去り、資は薄く、志のみ徒らに大きい少年学士は、人知れず粗末な衣を涙で濡らし、病葉のごとき悲嘆に何度もくれた。その誠を感じて物質で援助する金持ちもあり、その挙を壮として出版を承諾する書肆もあって、辛うじて計画を継続した。だが必要とする数多い書籍は、他家の屋敷の奥に深く秘蔵されたものや、権勢家が珍宝として代々所蔵するものが大半で、書生が借りて閲覧することは容易でなく、たとえ望む書物が市場に現れても、財布の蓄えが乏しくて入手できず、ただ一書のために縁故にすがり、ただ一聞のために訪問を重ねなければならないことが常であった。しかし境遇の不便を自覚すれば、その境遇を克服しようというのが、意志の人たる博士の心得である。種々の欠乏、あれこれの艱苦のどれもが勉学に励む機会となり、物質的な困苦はおおむね精神力で補った。かくして資料の渉猟に世の移り変わりを忘れ、机上の分析に年を送り、寝食を忘れ、日に夜を継ぎ、五年にして第一冊を刊行し、さらに八年の労苦に耐えて全篇の執筆を終えた。通算十三年間、春に花が咲いて散ろうが、秋に雁が来て去ろうが、東西に材を渉猟して、写し、諳んじ、昼夜研究を続け、証拠を古今に求め、半生に蓄えた知識を結晶させ、心血をひとところに傾注した。一頁二千三百字、総字数千二百万字、細字大板にて五千頁余りの膨大な書巻…日本で最初の大著作である。学界初めての偉観と誰もが心服する『大日本地名辞書』は、実にこのように超人的な精力と並外れた苦勞により生まれた。博士の特殊な性質が一大金字塔となって不朽の業績を学問界にもたらしたのである。

『大日本地名辞書』は、名前のみ聞けば地名を集めた編纂物に過ぎぬと思うだろう。しかし内実は、山川、城邑、道路、宿場、性情、風俗、文書、器物を一定の規則で配列せるのみならず、仔細な調査と明確な証明により、個々の地名に関する書籍の誤謬を正し、伝わり来たれる誤解を解き、千古の疑問を一筆明断した四万四千項、即ち四万四千の断案である。それゆえ実質の価値は実にその百倍である。学識が博士に比肩する者も、また博士の十倍百倍の機会と便益を有する者もいるだろう。だが博士の如く誠が篤く、博士の如く気魄を兼備した者に至っては、天下に二人としない。中身も外形も空前絶後であり、学界に大いに貢献すると同時に精神界でも一大教訓となるこの業績は、やはり博士でなければなしえぬことである。この書の内容について論評を試みることは門外漢には何の面白味もないことであろう。まして深い関わりのない我らにとってはなおそうであるが、十年あまり独立独歩で考え、検証し、執筆し、校正し、衆の力を合わせてもできないことを一人で行ない、数世にわたっても成しがたい偉業を十数年にして成し遂げた功績と感動は、誰の目にも明らかである。早稲田大学図書館に委託された高さ一丈五尺に積まれた自筆原稿を見て、ただ限りなく驚嘆し嘆服した者は私一人ではあるまい。ああ、これが貧しき一書生の独弁であり、誠心の一表現であり、学問と経歴と資力、どれも持たない一少年の学究事業なのである。

吉田東伍は依然として吉田東伍である。博士自身は変化がなかったが、世間の認識はそうではなかった。この書の完成により世間とはつぜん吉田東伍という博学多識の士、剛魂毅魄の人を発見した。今更ながらその学識に推服し精力に驚嘆したのである。青二才のくせにといって片隅に閉塞させていた学界も、天を衝く勢いのこの人物をそれなりに認識し相当の敬意を表さざるを得なくなった。こうして書生吉田に文学博士号がみずから飛来し、ついに歴史地理学界における博士の地位は日月のごとく章かになった。

(1918年1月31日『毎日申報』1面)

#### 故吉田東伍博士(四)

率直に言えば、私もまた地名辞書を介してはじめて博士と博士の能力を知った者の一人である。『古史断』を読んでその篤学たるを知り、『政教考』を読んでその鋭眼たるを知ったが、限りなき弾力性、常ならぬ勇氣、そして不屈の魄を併せ持つ人格者であることを知ったのは実にこの書『大日本地名辞書』によってであった。まず、幾分誇張された書店の広告文に驚異の情を抱き、つぎにあの中国の黄香という学者も未見であろう書を網羅し、同じく郭璞でも明らかにしえなかったことまで明らかにするとき、広く精細を極めたその実際の作品に賛美の情が湧き、人格の発露であるところの作品と、そしてまた作品に現われたその人格の大きさに心を打たれたのであった。

私が博士の警咳に接したのは、地名辞書が完成する前年、早稲田大学に数ヶ月在籍したときに博士の日本地理と明治史の講義を聴いたことに始まる。当時の私は物を知らないこと甚だしく、博士の力量を識認するだけの眼がなかった。また博士は風采俊秀でもなく、言論卓抜でもなく、戯曲的な構成もなければ台詞のような飾り気もないため、講義室と舞台を混同している多くの学生にとって、博士の講義は大喝采を博するような精采あるものではなかった。さらに日本の歴史と地理に対する素養が足りない私にとって、平明な言辞に隠された該博な知識と、素朴な話しぶりに表われるその卓越せる見識を判断することは容易でなかった。そのために『地名辞書』およびこれに注がれる好評に接してはじめて一般的な研究よりも数等卓出していることを知ったのであった。その後は謙虚な言辞がむしろその権威を増し、朴訥な姿がいつそうその徳を発することを知り、仰慕の情を抑えられなかった。

偶然の椿事により私の学校生活が終わったことを告げられないまま京城に帰り、とうとう直接お目にかかる機会はなかった。ただ『維新史八講』、『地理的日本歴史』、『倒叙日本史』等を介して蒙を開き、あわせてその壮健な精神と独特な方法論に感嘆するばかりであったが、去る丙辰(1916)の年の春、用事で東京に滞在した際に偶然の機会があって旧誼を取りもどし、あらためて教えを乞うことになった。日々往来して酌み交わすあいだに互いに意思が通ずることを知り、それにより私が得た益はまことに大きかった。もちろん歴史上の議論においては見解が大きく異なる点もあり、また意見が違うところも多かったが、私が博士に望むところと博士が私に期するところとは同じであり、まことに意義深いものがあった。ああ、世に曲学阿世の徒が多く、事実を歪曲し方便を強行する不忠者が史学界に跳梁する今日、博士の性格と力量によって明らかにし正すべき事案は一つにとどまらない。年齢も壮年であり職業の地位も高いのだから、私の心からの願いと期待がおのずと博士に偏注したことは何ら怪しむに足りない。

(1918年2月1日『毎日申報』1面)

#### 故吉田東伍博士(五)

世間に恐ろしいことは多いが、宗教が権力の機関となり、法律が金銭の手足となり、学問が政略の化身となることなどは、その動機からして憎むべきであり、その結果ほど恐ろしいものはない。まして史学は、文明の記録という点で百世の真偽を照らす鑑であり、民族の公式記録という点で万世の榮辱のかなめである。もし強権が爪牙となって弱者を虐げるなら、その損失と苦痛はどれほどであろうか。然るに、天下の耳目を欺いて庶民の精神を摩耗させ、判断力を狂わせ、得失観念を失わせるには歴史を悪用することが最も巧みな方法であるから、史家にはこの種の誘惑と脅迫がつきもので、意志の弱さに打ち勝たねば利欲に負けることになる。硬骨に法を守り、頑強に直言する者が少ないことは、実に理由のあることなのだ。いまこの歴史学界において、博士のごとく権力に媚びず、便宜に流れず、観ることを信じ、信ずることを言い、努めて真を求め、ことさら虚言を弄さぬ人格者を有することは、実に頼もしいことである。私が衷心より博士を欽慕する理由もまたここにある。

邪気がはびこるのをいかに防ぎとめ、溢れる怪潮をいかに退けるか。史権の擁護を任ずる者は誰であり、真理の宣揚に尽す者は誰なのか。天下の憂いは、学識者が少ないことでも、智能ある者が少ないことでも、健筆者と雄弁者のないことでもない。天下の憂いは、志操の峻厳な学識者と、気魄の雄毅な有識者と、主義に従う健筆者と雄弁者が、



絶無僅有なことにある。博士の史学界での存在がまさに稀有の一人に当たるのであるから、博士の存亡が史学界に影響するところ、どうして少ないと言えるだろう。誰よりも切実に博士を信じ期待するところの大きかった私は、博士の健闘を祈ると同時にその長寿を願わずにはいられなかった。あわせてその健闘と長寿が我々にとって大いに関係あることを深く信じたのであった。

一昨年の冬、東京より帰って以来、あるいは寒さを鉄窓に吟じ、あるいは毒を銅鬼に受けて<sup>27</sup>前より百倍も忙しくなったために、季節が変わっても春風に気づかず、何度かの手紙に返事もできなかった。しかし博士の期待に応えたいという誠意は、博士を喜ばせたいという思いと共に少しも衰えはしなかった。忙しさに追われて奔走しながらも留意して準備したのものもあり、楽浪居に膝を交え心置きなく討論する機会の到来を待っていたところ、突然博士の訃報に接したのである。ああ、まさに夢としか思われぬ。

博士の臨終は真実なのか。博士の姿と声に接する機会は本当に消えてしまったのか。疎慢な私は博士の病のことを知らず、危篤であることも知らなかった。博士の広い額は前のように『日本歴史辞書』<sup>28</sup>の草稿に埋もれており、博士の疎な髯はあいかかわらず「灘の生一本」の樽をのぞき込んでおり、その意気ますます盛んにして我々の期待を必ず実現するだろう、ひさしくお目にかかれずまた音信も絶えて久しいとはいえ、博士のために準備した多少の書籍と話題は必ずや博士のお気に召して、青緋黄縹色の朝鮮書籍で四壁が埋まったあの書齋で何の遠慮もなく議論を応酬する材料となり、そうして得た結果は世の邪説と謬見を打破するために一大威力を発揮するだろう、そう思っていたというのに、一朝にして百想が無に帰するなど夢にも思わなかった。ああ、天はこの学問……私の関与しようとしている史学に禍をなした。博士がいま夭折するとは、どうしていまなのだ。雨に菌が繁殖するようなご都合主義の学者や、迎合的な論者に毒された学界が博士の人格と勇気をますます必要としているときに、死はどうしてあの方を——ああ！

(1918年2月2日『毎日申報』1面)

#### 故吉田東伍博士(六)

学者の死ほど世にとっての損失はない。生まれながらに卓抜せる才能を具し、長じては刻苦の功を積み、学は天下の妙を極め、識は古今の変遷を推する者、それは金銭が生むものでなく、権力の産するところでもない。造化の霊によって育まれ、ようやく得ることができるのである。その人が存するときは匹敵する者がなく、その人が没すれば代わるものがなく、その死の惜まれることは、数知れず現われては消える勲章の陳列場か金庫番の犬のような者たちとは比べものにならない。たとえその命は一朝に消える燭のごとくであろうとも、業績が万古の活水に例えられるからこそ、死者はかろうじて憾みを残さずにすむのである。超人的な学識と絶世の功績をもつ博士のような人は、静かに終りを顧みてほほ笑んでいるのではあるまいか。とはいえ、もはや、その手から大作を期待することはできず、その口に滔々たる名言を望むこともできない。我々全員のために深く博士の死を追悼する次第である。そそり立つその功の寿命は天地と同じ長さであり、充積せる心の修養は千万人の鑑となるだろう。博士のために博士の冥福を祈ろう。長い川をゆく渡し舟を思い、古亭に宏壮たる屋敷を思う遙かな私の思いは、語りつくすことができない。

博士の趣味と生涯はすでに「東都釋書記」<sup>29</sup>に略及したので、ここでは繰り返さない。ただ『松雲詩草』<sup>30</sup>のなかの遺吟数篇を抄録して旧を思ふ銘に代える。知人の序「松雲詩草引」に

少年坦蕩無他異、耕暇耽詞章、為父兄所厭、而生猶拂改、常曰死且無悔  
とあるのを見ると、彼が一時どれほど詩を愛したかが分かるであろう。また、

然生独学無師、故其詩不能洗鍊以就典型、頽唐自喜、未幾遊北海道、求耕漁之地、蓋欲有所修也、而不得志、悵然南帰、見故旧歎曰、未技誤身、吁命之尽也、乃發憤棄詩去稿、不知所之、時歳二十八云  
とあり、博士の種々の智識が実にこの時の発憤に起因するものであったことが分かる。

○春暮偶成

崔南善と吉田東伍の知られざる交友  
付 崔南善の追悼文「故吉田東伍博士」の翻訳

西窓日永篆煙斜。斜引微風上淺紗。新緑満林春欲暮。半床書帙落松花。

○登古城墟

原田秧緑乱蛙鳴。遺墨蕭々入耨耕。野老迎人為陳説。麦雲黄処是牙城。

○孤征

千里孤征客。登程幾顧回。多情山外雨点々送人来。

○春雨

落花委地欲黄昏。山没烧痕草色繁。煙雨如来又如去。濛々五十有三村。

○黄石先生来寓新潟賦呈

太湖七十二峯高。久矣雄藩建羽旄。養士百年依祖徳。尽忠半世見人豪。滄桑閱世在詩史。烟水韜蹤脱戰袍。仍有詞鋒餘力在。来翻北海々門濤。

○登高懷古

群嶺西時勢崢嶸。樹梢隱見潮水平。岡陵委蛇抱郊野。指点形勝双眸明。神宅仙境絶塵俗。黄金白石鍾秀英。前国府後藩城。沿革与世幾變更。鎮<sup>31</sup>東將軍経略処。一片残碑徒勒名。侯家世業口天命。四十八館荆棘横。愁来俯仰不能去。暮雲慘愴風濤声。何以盪胸断芥蒂。好觀海旭天際紅。(完)

(1918年2月3日『毎日申報』1面)

## 謝辞

本研究はJSPS 科研費 20H01252 の助成を受けている。

## 注

「はじめに」と「解題」の部分は西江大学の崔珠瀚氏により韓国語に訳され、韓国の学術雑誌『近代書誌』22号(2020年12月発行)に掲載された。

<sup>1</sup> 新潟県立大学名誉教授

<sup>2</sup> 九州大学大学院博士課程 朝鮮史学専攻

<sup>3</sup> 『六堂崔南善全集』全15巻、高麗大学校アジア問題研究所編、玄岩社、1975/『六堂崔南善全集』全14巻、亦楽、2003

<sup>4</sup> 韓国の研究者ユン・ソヨンとは、東伍が崔南善、玄相允、李丙燾ら早稲田大学留学生に与えた影響について論じたが、崔南善と東伍の交友について具体的な言及はしていない。「吉田東伍의 朝鮮研究」『日本思想』第29号、2015.12、109-185頁

<sup>5</sup> 崔南善は1916年10月24日から29日まで「江戸釋書記」、10月31日から1917年1月16日まで「東都釋書記」と題して『毎日申報』に東京見聞記を連載した。また東伍は1915年8月に朝鮮に講演旅行をしており、名前が知られていたこともある。

<sup>6</sup> 千田稔『地名の巨人 吉田東伍—大日本地名辞書の誕生』角川書店、2003、92頁

<sup>7</sup> 註4に挙げたユン・ソヨン論文「吉田東伍의朝鮮研究」参照。東伍を歴史歪曲学者とした論文についての言及は151頁。そのほかに、千田稔『地名の巨人 吉田東伍』109-125頁、230-236頁を参照。

<sup>8</sup> 千田稔『地名の巨人 吉田東伍』137頁

<sup>9</sup> 波田野節子「草創期韓国文学者たちの日本留学」『韓国近代作家たちの日本留学』白帝社、2013、17頁

<sup>10</sup> 崔南善は『少年』と『青春』に、当時日本で出ている雑誌や書籍の記事を大量に翻訳して載せた。田中美佳「崔南善の初期の出版活動にみられる日本の影響」『朝鮮学報』249・250輯、2019.1、田中美佳「崔南善主幹『青春』(1914-1918)における「世界的知識」の発信方法—日本の出版界との関係を中心に」『朝鮮史研究会論文集』第57集、2019.10参照

<sup>11</sup> 「東都釋書記—楽浪居(二)」1916年11月30日『毎日申報』1面に「玄君は今将来に彼(東伍—引用者)の帳下に遊べるものなり」とある。

<sup>12</sup> この見解は、阿賀野市立吉田東伍記念博物館館長の渡辺史生氏のご示唆に依る。

<sup>13</sup> 千田稔『地名の巨人 吉田東伍』107頁

<sup>14</sup> 同上211-214頁

<sup>15</sup> 「吉田東伍『松雲詩草』復刻にあたって」『松雲詩草(復刻版)』吉田東伍記念博物館、1997.9.17

<sup>16</sup> 崔学柱『私の祖父六堂崔南善』ナナム、2011、237頁

<sup>17</sup> この「朝鮮地名辞書」は1931年に刊行された『大東地名辞典』のことだと崔学柱氏は推測している。タイトルは『大日本地名辞書』

に似ているが、朝鮮の地名を並べたリストである。『六堂崔南善全集』第8巻所収

<sup>18</sup> 崔学柱『我が祖父 六堂崔南善』236頁

<sup>19</sup> 同上

<sup>20</sup> 崔学柱氏は1991年に刊行された「韓国民族文化大百科事典」全28巻が「朝鮮大辞典」を継承したものとみなし、そのような膨大な作業を祖父は一人で行おうとしたのだと書いている。241頁

<sup>21</sup> 原文は鉅鹿になっている。東吾は保田の旗野家に生まれ、大鹿の吉田家に養子に行き長女カツミと結婚した。

<sup>22</sup> この部分は『大日本地名辞書』の発刊に寄せて市島謙吉の「大日本地名辞書著作の顛末」の中にある「君は、もと山村に生長し學術を以て身を立つるの初志なかりしが故に、系統のある教育としては、中学の課程をだに卒ることなかりしが」と重なる。崔南善が参考にしたのだろう。このほかにも参考にしたと思われる部分がある。(板垣俊一氏のご指摘に依る)なお東伍は10歳から13歳まで新潟県英語学校に在学している。

<sup>23</sup> 東伍は1887年から2年間、水原小学校高等科で英語、数学、歴史、体育を教えた。

<sup>24</sup> 『日韓古史断』の宣伝文句は原文を参考にした。

<sup>25</sup> 原文は『徳川時代政教考』になっている。

<sup>26</sup> 原文は『利根川治水考』になっている。

<sup>27</sup> 「鉄窓」は牢獄を表わすが、この時期に崔南善が獄に入った記録は見当たらない。「毒を銅鬼に受け」の意味は不明。

<sup>28</sup> 東伍の死により未完に終わった『国史百科大辞典』のこと。

<sup>29</sup> 「東都繹書記」『毎日申報』1916年11月29日から12月1日まで「楽浪居」(一)(二)(三)として連載された。「楽浪居」とは東伍の書齋の名前である。なお、1919年9月に門弟の手で刊行された『吉田東伍博士追懷録』にはこの文章が崔南善により日訳され収録されている。

<sup>30</sup> 『松雲詩草』は吉田東伍の自選私家版の漢詩集。満16歳から27歳までの漢詩が収められている。東伍はこれを50歳の記念に知人に配ったという。「吉田東伍『松雲詩草』復刻にあたって」『松雲詩草(復刻版)』吉田東伍記念博物館、1997

<sup>31</sup> 原文は「鉄」になっている。